

1. しかし、祭りもすでに中ごろになったとき、イエスは宮に上って教え始められた。(7:14)
 - a. イエスは慣習的に祭りに上られたのではない(9節)。エルサレムへ上るには2つのグループ(1つは男性、もう1つは女性と子供)で行くのが慣習的な行き方である。イエスはそうではなく内密に上って行かれた(10節)。
 - b. イエスはおそらくご自分を殺そうとしている人々の待ち伏せを避けるために内密に上られたのであろうが、結局は神はイエスをこの公的行事の中で人々に知られる状況を作り出される。
 - c. 人々は彼を殺そうとし、神はイエスにエルサレム中で最もにぎわっている行事の中で語る機会を与えられた。もしもイエスが100%神を信じていなかったらどんな気持ちになっていたのだろうか。

2. ユダヤ人たちは驚いて言った。「この人は正規に学んだことがないのに、どうして学問があるのか。」(7:15-16)
 - a. ここでいくつかイエスについての興味深い事実がうかがえる。1) すばらしい教師であった。私たちの罪のために死んでくださったすばらしいお方であると同時に、誰も聞いたことがないほどすばらしい教え方をされた。2) 正式な教育を受けていなかった。これには良い面と悪い面があったと思う。良い面はパリサイ人やサドカイ人の教えを払いのける必要がなかったということ。悪い面は同郷の人々からのサポートを受けられなかったこと。
 - b. イエスは、その教えがそれほどすばらしい理由は、それが神ご自身からのものだからだと明らかにされる。クリスチャンであってもお気に入りの先生、著者、牧師、テレビ伝道者などがあるだろうが、それらの人々が語っていることが直接神から来ていると錯覚してしまうことがある。その結果、誰かがそれに反することを言うと、それを間違いだとしてしまう。
 - c. 私たちのお気に入りの先生は聖霊を通したイエス・キリスト以外にはいない。イエスの声を聞き分けるようになることが私たちが学ぶべき最も大切な訓練である。

3. だれでも神のみこころを行おうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかがわかります。(7:17)
 - a. イエスはまた、私たちが聞いていることが神からのものなのか見分け、証明する方法を明らかにしている。神からの声を聞いているかどうかの本当のテストは他人のことばを通じてわかるものではない。もちろん他の人から確信を得られることもあるが、イエスはそれが神からのものであるかを知るにはそれを行うことだとおっしゃっている。
 - b. 私たちは常に日々の生活の中で、意思をもって神のみこころを行うのか、それとも神のみこころを仮定するだけで本気で行うことはしないのか、という選択をしていく。
 - c. 神のみこころを行うことはしばしば周りからは馬鹿げて見えたり受け入れられないことがある。しかし周りの人からの恐れや拒絶に打ち負かされそうな時、自己防衛や自己PRのために神を恐れたり拒絶してはいけない。

4. 自分から語る者は、自分の栄光を求めます。しかし自分を遣わした方の栄光を求める者は真実であり、その人には不正がありません。(7:18)
 - a. 私たちは常に自分を称賛するのか、神に栄光を帰すのか、という選択に直面している。神に栄光を帰すことは私利私欲がないこと、自分を称賛することは自分本位からくる。
 - b. 自分の体と思いは私心のない自分と激しく対立し、自分勝手なライフスタイルを生きるため常に自らの心を自己義認と自己正当化で埋めていく。これがイエスが「自分から語る者」とおっしゃっている意味である。
 - c. 自己称賛をするのか、しないようにするのか、というチョイスはクリスチャンが受ける最も厳しい試みの一つであるが、イエスは「自分のいのちを救おうとする者はそれを失い、イエスのためにそれを失う者はそれを見い出す」と宣言しておられる。自分を犠牲にして神をたたえる者は神のことばは正しいと確信できる。神の計画に従って生きる以外に良い生き方はない。